



















死んで行つたこの若い作者は尊い。あんな涙を心にためてゐながら、うつかり眼に浮かせなかつた程奥行の深かつたその性格は美しい。あすこまで行くと仙子氏は概念的な女性といふものから脱して見事な人になつてゐる。女流作家として仙子氏をまつことはもう出来ない。

違つた意味に於て「酔ひたる商人」「お三輪」の如き作品も亦深く尊重されなければならぬと思ふ。それは人間性の習作と見て素晴らしい効果を収めてゐる。あれだけにしつかり物を見る眼があつて、自己への徹底が強い響を傳へるのだなどいふことを首肯させる。輕妙に見えるユーモアと皮肉との後ろに、作者は個性と運命とに對する深い洞察と同情とを寄せてゐるのではないか。

私は一々の作品に對してもういふことをしまい。仙子氏はその心底に本當の藝術家の持たねばならぬ誠實を持つてゐた。而してその誠實が年を追ふに従つて段々と光を現はして來てゐる。この作者はいゝ加減な所で凋落すべき人ではなかつたに違ひない。年を経れば經るほど本當の藝術を創り上ぐべき素質を十分に備へてゐたことが、その作品によつて窺はれる。十分の才能を徹視の支配の下におき、女性としては珍らしい程の徹視力を自分の性格と結びつけてゐたのはこの作者だつた。だからその藝術が成長するに従つて益根柢の方へと深まつて行つたのだ。この點に於て彼女の道は極めて安全だつた。而かもその道が僅かに踏まれたばかりで彼女は死んでしまつたのだ。

（前略）　ところが體が悪くなつて來るために、頭がよくなつて來るのか、それともあまり頭が明晰になり過ぎるために體を倒してしまふのか、どつちが原因だかいつも分りませんが、とにかく少し具合が悪くなつて來ると、却て手紙なども書きたくありません。今度だつて惡寒から熱、惡寒から熱といふしつきりなしのすきをねらつて——しかし今はもう惡寒はやみましたから御安心下さいまし——すきをねらつてといふよりもすきを掠奪して、よく手紙を書きます。頭がなんでも何かさせないではおかないのです。それに自分でも恐いほどはつきりして來てもくろんでゐるある長いものゝ中の主人公や女主人公が、惱んだり、苦しんだり、愛したり、愛さなかつたり、墮落したり、

救はれたりしてゐるのと一所になつて、自分も苦しんだり泣いたりしてゐます。私の眼にはこの頃涙が絶えません。それはいつの間にか泣いてゐるので、みんな空想の事件や、感情のためなんです。群雄割據のやうにいろんな話が一時に頭を擡げて來て、たつた一人の私をひっぱり尻にしてゐます。若し今この要求のまゝに従つたら、こつちを二三枚、あつちを二三枚といふやうに頭だけのものがいくつも出來て、それでおしまひになつてしまふでせう。自分ではちやんと、到底その一つだつても完成しきらないのをよく知りぬいてゐますもの。これが病氣に悪いんだといふこともよく知つてゐますから、讀むこと又書くことは勿論、どんなにいゝ言葉や場面がうかんで來ても、それを

拭き消し拭き消ししてゐます。……（中畧）病氣をしてからも  
う足かけ四年になります。暗いことを忘れかけると思ひ出させ  
られ思ひ出させられしてさんざん生殺しの目にあはされました。  
随分よくこらへたつもりだけでも、それでもまだまだ足りないな  
ら、いくらでもお前の満足するまでこらへようなどと齒をくひ  
しぼる下から、とてつもない侮蔑の色がわが口許にのぼつてゐ  
るのにこの頃よく氣がつきます。なぜだか分りません。反抗か  
しらとも思つてみるけれど、どうもちがひます。もつともつと  
靜な強い心なのです。傲然として最も大きい恐怖の上に立つて  
ゐるのです。なんにも怖くないのです。——殊によつたら、人  
が何等の事件的原因なくして、自殺を誘惑されるのは、こんな

時ではないか知らななども思ひました。（下略）

これは仙子氏が死ぬ年の正月に、私にあてゝ送つてくれた手紙の一節だ。彼女の胸の中にどれほど實感から生れた素材が表現を待つて潜んでゐたかを知ることが出来ると共に、死を始終眼前においてゐねばならなかつたその心に、どんな力の成長が成就されつゝあつたかは、おぼろげながらも察することが出来る。

最もいゝのは仙子氏が野心家ではなかつたことだらう。實生活上に彼女がどれほどの覇氣を持つてゐたかは知らない。又創作家としてどれ程の矜恃を持つてゐたかそれも知らない。少くとも仙子氏には自己の能力を放圖もなく買ひ被つて、自分に背負投げを喰ふやうな醜いことは絶対にしなかつたといつていゝだらう。

いかなる野心があつたにしても、少くとも彼女は自分の取扱ふ藝術そのものに對してはいつまでも謙抑な處女性を持ち續けてゐた。自分の持つ心の領土の限界を知り、そこから苛察に亘らないだけに貢物を收める勝れた聰明な頭腦を持つてゐた。だからその作品には汚すことの出来ない純眞な味ひが靜かに充ち満ちてゐる。これは一人の藝術家にとつて、やさしく見えて決してやさしくない仕事だといはなければならない。極めて眞摯な性格のみがこのことを成就し得る。

仙子氏はまた自分の心を、若しくは生命力を外界の影響にわづらはされることなく見つめることの出来た一人だと思ふ。氏の藝術は大體に於て自然主義風な立場の上に創造されてゐるといつて

いい。而かも氏は主義に依據するよりも、それ以上にいつでも自分の心に依據してゐた。だから作品の内容には、いつでも機械的な仕組み以上に濕ひのあるハートが働いてゐる。如何に皮肉に物を見てゐる場合でも、如何に冷靜に生活を寫してゐる場合でも、その底には不思議にも新鮮な生命よりの聲が潜んでゐる。一箇の無性物の描寫に於ても、例へば、手の平に乗せた生れたての鶏卵を「手の平に粉を吹くばかりに綺麗な恰好のよい玉子」といつたり、冬の夜寒の病室の電燈を「電燈は夜の世界から完全にこの一室を占領したのに満足したらしく、一時自信をもつてその光輝を強めたけれども、やがて彼はその己の仕事になれた。さうして最早一定の動かない光をのみ、十分な安心と僅なる倦怠との中に發



散した。恰も私一人の上には、それで十分であると見きはめをつけたかの如く。」といつてゐるのなぞは、無數なかゝる例の中から、勝手に一二を引抜いて見たに過ぎぬ。

明治以來出現した女流作家の數は少くない。その人達の中には、私のやうに云つたなら、讚辭を呈し切れないうやうな作家が他に澤山あるのかも知れない。讀書に怠慢な私はかゝる比較をする智識を持つてゐない。然し私にとつてはそんなことはさしたる問題ではない。私はたゞ感心したものを感心したやうに云ひ現はせばそれで満足が出来る。未熟な作家の一人なる私の考へが、仙子氏の迷惑にならないで濟めばそれで嬉しい。私はどうしても惜しい人が早死したと思ふ。私の前には美しく完成さるべかりし藝術品の

痛ましい破片がある。書いても書いても、その總量が遂に藝術品たり得ざる人の多い中に、この破片は美しい。完成されぬ表現の中に、一つのよい心が残された。永く残された。多くの人はこの心に接することによつて、痛い運命の咎の傷を親切に撫で慰められるだらう。

(一九二〇・四月廿五日深更)

# 青空文庫情報

底本：「叢書「青踏」の女たち 第10巻 水野仙子集」不二出版

1986（昭和61）年4月25日復刻版第1刷発行

底本の親本：「水野仙子集」叢文閣

1920（大正9）年5月31日発行

入力：小林徹

校正：山本奈津恵

1998年10月28日公開

2005年11月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水野仙子氏の作品について

## 有島武郎

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>